

にゆう

三遊亭円朝

青空文庫

昔^{むかし}浅^{あさ}草^{くさ}の駒^{こま}形^{かた}に半^{はん}田^だ屋^や長^{ちやう}兵^{べい}衛^{ゑい}といふ茶^{ちや}器^きの鑑^め定^め家^かがご^ござ^ざい^いま^まし^した。其^{その}頃^{ころ}諸^{しよ}侯^{こう}方^{がた}
 へ召^めされ、長^{ちやう}兵^{べい}衛^{ゑい}が此^{この}位^{くらゐ}の値^ね打^{うち}が有^あるといふ時^{とき}は、直^{ちき}に其^{その}代^{しろ}物^{もの}を見^みず^ずに長^{ちやう}兵^{べい}
 衛^{ゑい}が申^{まう}しただけにお買^{かひ}上^{あげ}にな^いつたと云^いふし、此^{この}人^{ひと}は大人^{たいじん}でご^ござ^ざい^いま^ます^すから、大^{たい}概^{がい}
 な処^{ところ}から呼^よびに來^きても頓^{とん}と参^{まゐ}りませ^{せん}ん。家^{うち}には変^{へん}な奉^{ほう}公^{こう}人^{にん}を置^おきま^まして、馬^ば鹿^かな者^{もの}を
 愛^{あい}して楽^{らく}しんでゐるといふ極^{ごく}無^む慾^{よく}な人^{ひと}でご^ござ^ざい^いま^まし^した。長^{ちやう}「何^{なに}を、往^いか^かねえよ、何^{なん}だど。
 女^{にょ}房^{ぼう}「でもお手^て紙^しが参^{まゐ}りましたよ。長^{ちやう}「何^{どこ}処^{ところ}から。女^{にょ}房^{ぼう}「萬^{よろ}屋^{づや}五^ご左^ざ衛^{ゑい}門^{もん}さんから。長^{ちやう}
 「ムウ^むン又^{また}迎^{むか}ひか、どうも度^{たび}々^々招^{せう}待^{たい}状^{じやう}をつけられて困^{こま}るなア、先^{むか}方^{かう}は此^{この}頃^{ころ}茶^{ちや}を
 始^{はじ}めたてえが、金^{かね}持^{もち}ゆゑ極^{ごく}我^{わが}儘^まな茶^{ちや}で、種^い々^々道^{だう}具^ぐを飾^{かざ}り散^ちらかして有^あるのを、皆^{みんな}なが
 胡^こ麻^まアするてえ事^{こと}を聞^きいたが、己^{おら}ア然^さういふ事^{こと}をするのが厭^{いや}だから断^{ことわ}つてくんせえ。女^{にょ}
 房^{ぼう}「だつて貴^{あなた}方^{がた}、度^{たび}々^々の事^{こと}ですから一度^{いちど}往^いらつしやいな、余^{あん}り勿^{もつ}たい^{たい}を附^つけるやうに
 思^{おも}はれるといけませんよ。長^{ちやう}「茶^{ちや}も何^{なに}もやつた事^{こと}のねえ奴^{やつ}が、変^{へん}に捻^{ひね}つたことを云^いつたり、
 不^ふ茶^{ちや}人^{にん}が偽^{にせ}物^{もの}を飾^{かざ}つて置^おくのを見て、これは贗^{にせ}でご^ござ^ざい^いま^ますとも謂^いへんから、あゝ結^け
 構^{こう}なお道^{だう}具^ぐだと誉^ほめなければならん、それが厭^{いや}だから己^{おれ}の代^かりに彼^あの弥^や吉^{きち}の馬^ば鹿^か野^や郎^{らう}を
 遣^やつて、一^{いちど}度^どでこりこりするやうにしてやらう。女^{にょ}房^{ぼう}「お止^よし遊^{あそ}ばせよ、あなたは彼^{あれ}を怜^り

惻こうと思おほしめ召めして目を掛かけていらツしやいますが、今朝けさも合羽屋かつばやの乳母おんぼさんが店みせでお坊ぼうさん
 を遊あそばして居ゐる傍そばで、弥吉やきちが自か分の踵かかとの皮かわを剥むいて喰たべさせたりして、お氣きの毒どくな、子こども
 供衆しじゆだもんですから、何なにも知ららずむしやく喰たべて居ゐましたが、本ほん当たに汚きたい事ことをするぢや
 やア有ありませんか、それに此この頃ごろでは生なまいきになつて、大人おとなに腹はらを立たせますよ。長い
 や、馬鹿ばかと鉄てつは使まひやうだ、お前まへは嫌きらひだが、己おれは嗜すきだ……弥吉やきちや何ど処こへ往いつた、弥吉やきち、
 弥や「えゝゝ。長い「フゝ、返かへ事ことが面おも白しろいな……さ此この方ちへ来こい。弥や「えゝゝ。長い「何なんだ大おほき
 な体なり軀こをして立たつて居ゐる奴やつが有あるか、坐すわんなよ。弥や「用もちが有あるなら直ちきに往いつて来くるにやア立
 つて居ゐる方ほうが早はやえや。長い「馬鹿ばかだな、苟かり且なりにも主しゆ人じんが呼よんだら、何なにか御用ごようでも有ありますか
 と手てを突いいて云いふもんだ、チヨツ（舌打ち）大おほきな体なり軀こで、汚きたえ手ての垢あかを手ての掌ひらでぐるノ
 揉もんで出でせば何どの位くらゐてがら、物ものを積つつて考かんへて見みろ、それに此この頃ごろは生なまいきにな
 つて大分だいぶん大人おとなにからかふてえが、宜よくないぞ、源藏げんぞう見みたやうな堅かたい人ひとを怒おこらせるぢやア
 ねえぞ。弥や「なに彼あの人ひとはね疝せん氣きが起おこつていけないツてえから、私わたしがアノそれは薬くすりを飲のん
 だつて無益むだでございます、仰あやむ向むけに寐ねて、脇差わきざしの小柄こつかを腹はらの上うへに乗のつてお置おきなさいと
 云いつたんで。長い「ムゝウ禁まし厭なひかい。弥や「疝せん氣きの小柄こつかツ腹はら（千住しゆの小塚こつか原はら）と云いつたら
 怒おこりやアがつた、跡あとから芳藏よしざうの娘むすめが勞らう症しやうだてえから、南たう瓜なすの胡麻ごま汁じゆを喰くへつてえ

ました。長「何だい、それは。弥「おやく／＼ 勞症南瓜の胡麻汁つて。長「馬鹿な事を
 云ふな、手前は江戸ツ子ぢやアねえぞ、十一の時三州西尾の在から親父が手を引いて家へ
 連れて来て、何卒置いてくれと頼まれる時、己が鼠半切へ狂歌を書いて遣つたツけ、
 ム、ウ何とか云つたよ、え、西尾から東を差して来た小僧皆身の為に年季奉公と、東
 西南北で書いて遣ると、お前の親父がそれを國へ持つて往つて表装を加へ、掛物
 にして古びが附き時代が附きますによつて、忤も成人致しませう、そればかりが楽しみ
 でございます、何分どうかお世話を願ひますと、親はそれ程に思つてゐるのに、親の心
 子知らずと云ふはお前のことだ。大きな体軀をして居ながら、道具は些とも覚えやアしね
 え、親の恩を忘れちやア濟まんぞ。弥「アハ、親玉ア。長「何だ、人が意見を云つて
 るのに誉る奴が有るか、困るなア、もう十八だぜ貴様も。弥「然う／＼来年は十九だ。長
 「其様なことは云はなくつても宜い、就ては今萬屋から手紙が来たんだ、先方で己の顔
 を知らんから、お前己の積で代に往け。弥「へえ、……代てえのは……。長「己の代りに
 往くんのだ。弥「ハ、それぢやア私が此の身上を貰ふのだ。女房「御覽なさい、馬鹿
 でも慾張つて居ますよ。長「黙つてゐな、己ア馬鹿が好だ……。其儘却つて綿服で往け、
 先方へ往くと寄附きへ通すか、それとも広間へ通すか知らんが、鍋島か唐物か何か敷

いて有るだらう、かこ 囲ひへ通る、ざざり 草履が出て居やう、ろち 露地は打水か何かして有らう、せんば 先
 方も茶人だから客は他になければお前一人だから広間へ通すかも知れねえが、お前は
じぎ 辞儀が下手で誠に困る、へた 両手をちごはごに突いてはいけねえよ、さき 手の先と天窓の先を揃へ、
どう 胴を詰めて閑雅に辞儀をして、かね／＼お招きに預かりました半田屋の長兵衛と申
 す者で、至つて未熟もの、このち 此後ともお見知り置かれて御懇意に願ひますと云ふと、先
こちら 此方へと、めき 鑑定をして貰ふ積りで、じまん 自慢の掛物は松花堂の醋吸三聖を見せるだらう、
よ 宜い掛物だ、はこがき 箱書は小堀権十郎で、したて 仕立が慥か宜かつたよ、てんち 天地が唐物緞子、なか 中が
しらちやち 白茶地の古金欄で、な 弥「へえ……何を。長「松花堂の三教醋吸の図で、ふうたい 風袋一文
んじ 字が紫印金だ、よく見て覚えて置け。弥「へえー紫色のいんきんだえ、あれは
かゆ 癢くつていけねえもんだ。長「何だ其様な尾籠なことを云つちやアなりませんよ、けつこう 結構
おちく な御軸でございまして云ふんだ、い 出して見せるか掛けて見せるか知らんけれども掛けて有
つたら つたら先づ辞儀をして、おうはいけん 一応拝見して、したて 誠にどうもお仕立と申し、おちつき お落着のある流石
しろうくわだう は松花堂はまた別でございまして、あゝ結構な御品で、かやう 斯様なお道具を拝見致すのは私
たぐし 共の眼の修業に相成りますと云つて、み 身を卑下するんだ。弥「ひげするんなら、かど 角
かみゆひ の髪結床へ行きやア直だ。長「髻を剃るのではない、わがみ 吾身を卑しめるんだ、さ 然うすると先

方では惚込んだと思ふから、お引取値段をと来る、其時買冠りをしないやうに、其
 の掛物へ瑾を附けるんだ。弥「へえ、それは造作もねえ、破くか。長「破く奴が有るか、
 知れねえやうに瑾を附けるのが道具商の秘事だよ。弥「フ、フ、「ヒヂ」は道具商より置
 職の方がつよいで。長「黙つて人の云ふことを聞け、醋吸の三聖は結構でございませ
 なれども些と御祝儀の席には向きませんかと存じます、孔子に老子、釈迦は仏だからお
 祝ひの席には掛けられませんか、買つてくれと云はれないやうに瑾を見出して、惜い事
 は何うも些と軸ににゆうが有りますと云つてにゆうなぞを見出さなくツちやアいかねえ。
 弥「へえー……「にゆう」てえのは坊さまかい。長「何故え。弥「づくにゆうでございま
 すつて。長「然うぢやアねえ、軸に「にゆう」が有りますと云ふのだ。弥「へえー。長
 「にゆうを知らんか、道具商の御飯を喰つて、「にゆう」を知らん奴もねえもんだ。弥
 「アハ、何の事だ。長「瑾が出来たと云つては余り素人染るから、瑾を「にゆう」と
 云ふが道具商の通言だ。弥「へえ、始めて聞いた。長「何うかすると、お客さまに腰
 の物を出されるかも知れねえ、然うしたら私は小道具の方とは違ひますゆゑ刀劍の類は
 流違ひでございませから心得ませんが、拝見だけ仰せ付けられて下さいましと云つ
 て、先頭から先へ眼を附け、それから縁を見て、目貫から何うも誠にお差ごろに、定めし

御中身は結構な事でございませう、当季斯やうな物は誠に少なくなりましたがと云つて、服紗を刀柄へ巻いて抜くんだよ、先方へ刃を向けないやうに、此方へ刃を向けて鈍子先まで出た処でチヨンと鞘に収め、誠に結構なお品でございませうと、誉めながら瑾を附けるんだ、惜しい事には揚物でございませうと。弥「へえ天麩羅かい。長「解らんのを、長い刀を揚げて短くしたのを揚身といふ。弥「矢張あなごなぞは長いのを二つに切りますよ。長「喰ひ意地が張つてるな、鑑定が済むと是からお茶を立てるんで御広間へ釜が掛つて居る、お前にも二三度教へた事も有つたが、何時も飲むやうにして茶碗なぞは解りません、何でございませうか誠に結構な御茶碗でと一々聞いて先方に云はせなければなりませんよ、それからぼつぼつと烟の出るやうなお口取が出るよ、粟饅頭か蕎麦饅頭が出るだらう。弥「へえ、何人前出るえ。長「何人前なんて葬式ぢやア有るまいし、菓子器へ乗せて一つよ。弥「たつた一つかア。長「がつく喰ふと腹を見られるは。弥「ぢやア腹掛をかけて往きませう。長「フ、其の棧留縞の布子に、それで宜い袴は白棧の御本手縞か、変な姿だ、ハ、ハ、ハ、のう足袋だけ新しいのを持たしてやれ。弥「ぢやア往つて参ります。と火の附きさうな頭髮で、年寄だか若いかわりませぬ。長「随分茶の有る男だな……草履下駄を片ちんばに履いて往く奴があるか、狗がくはへて

往つた、外ほかに無いか、それではそれで往いけ、醋吸すすひの三聖せい、孔子こうしに老子らうしに釈迦しやくかだよ、天地てんちが
 からものどんす、唐物からもの緞子どんす、中なかが白茶地しらちやぢ古錦欄こきんらん、風袋ふうたい一文字いちもんじが紫むらさき印いん金きんだよ、瑾きんの事ことがにゆう
 だよ、忘れちやアいけないよ。弥や「へい畏かしこまりました。とびよこ〜出掛でかけましたが、愚おろ
 かしい故ゆゑ萬屋よろづや五左衛門ござゑもんの表おもて口ぐちから這入はいればよいのに、裏うら口ぐちから飛とび込んで、二重ぢゆうの
 建仁寺垣けんねんじがきを這入はいり、外庭そとにはを通とほりまして、漸々やうやく庭にはづた伝まひに参まりますと、萱門かやもんが有あつ
 て締しめてあるのを無理に押したから、門かどが抜ぬけ、扉はが開ひらく機はみに中なかへ転ころがり込み、泥どろだら
 けになつて、青苔あをこけや下草したくさを踏ふみ暴あらし、辻すべつて転ころんで石燈籠いしどうろうを押倒おしたふし、松まつケ枝えを折を
 るといふ騒さわぎで、先程さきほどから萬屋よろづやの主人あるじは、四畳よふかこひの囲はいへ這入はいり、伽羅きやらを焼たいて香かうを聞き
 て居をりました。弥吉やきちは方々はう／＼の覗のぞいたが誰だれも居ありません。ふと囲かこひへ眼めを附つけ、弥や「此こん中なかに
 人が居あるだらう。と怪けしからん奴やつで、指ゆびの先さきへ唾つばを附つけ、ぷつりと障しやうじ子しへ穴あなを開あけ覗のぞき
 見て、弥や「いやア何か喰くつて居あるやアがる。主人しやうじ「これ、誰たれか来たよ……誰だれだ、其処そこへ穴あなを
 開あけたのは、怪けからん人ひとだな、張立はりたての障しやうじ子しへぼつ〜穴あなを開あけて乱暴らんぼうな真似まねをする、
 誰だれだな、覗のぞいちやアいかん、誰だれだ。弥や「ハ、ハ、何どうか怒おこつてやアがる、えへ、御免ごめんなさ
 い。主人しやうじ「これは驚おどろいた……誰だれか来こいよ、変へんな人ひとが来きたから……其処そこは這入はいる処ところぢやア有あ
 りません、づか〜這入はいつて来きちやアいけません。弥や「門もんを破やぶつて這入はいつた。主人しやうじ「お、

く 乱暴狼藉で、飛石などは狗の糞だらけにして、青苔を散々に踏暴し、
 折角宜い塩梅に苔むした石燈籠を倒し、松ヶ枝を折つちまひ、乱暴だね……何方
 からお入来なすつた。弥「アハ、驚いちまつたな……コ、予々お招きになりました
 半田屋の長兵衛で。主人「へえー是は驚き入つた、左様とは心得ず甚だ御無礼の段
 々、何ともどうも、是は恐縮千萬……何卒是れへく速かにお通りを願ひます、何
 卒是れへ是れへ。弥「ハ、狭つこい処に這入つてるな……己ア手前に禁厭を教へてや
 らうか。主人「へ、御冗談ばかり……へえ成程……え、予々天下有名のお方
 で、大人で在つしやると云ふ事は存じて居りましたが、今日は萬屋の家へ始めて往く
 のだから、故意と裏口からお這入りになり、萱門を押破つて散々に下草をお
 暴しになりました所の御胆力、どうも誠に恐入りました事で、今日の御入来は何と
 も何うも実に有難い事で、大きに身の誉れに相成ります、何卒速かに此方へく。弥
 「私アお前にりん病が起つても直に療る禁厭を教へて遣らう、繩を持つて来な、直に療
 らア。主人「はてな……へえ。弥「痲病（尋常）に繩にかゝれと云ふのだ。主人
 「えへ、御冗談ばかり、おからかひは恐入ります、え、始めまして……（丁寧に
 辞儀をして）手前は当家の主人五左衛門と申す至つて武骨もので、何卒一度拝顔を得た

く心得居りましたが、中々大人は知らん処へ御来臨のない事は存じて居りました
 が、一度にても先生の御入来がないと朋友の前も実に外聞悪く思ひます所から、御
 無礼を顧みず再度書面を差上げましたが、お断りのみにて今日も御入来は有るまいと存
 じましたが、図らざる所の御尊来、朋友の者に外聞旁誠に有難い事で恐入
 ます……何うもお身装の工合、お袴の穿やうから更にお飾りなさらん所と云ひ、お履物
 がどうも不思議で、我々が紗綾縮緬羽二重を着ますのは心恥かしい事で、既に新五
 百題にも有ります通り「木綿着る男子のやうに奥ゆかしく見え」と実に恐入ります、何
 卒此方へ。弥「お前さんの処から頼みが有つたので見に来た。主人「それは誠に恐
 入ります。弥「手を揃へてお辞儀をするんだが何うだい……此位で丁度揃つて居
 るか居ねえか見てくれ。主人「へへへ、御冗談ばかり。弥「揚物が解るか、揚物て
 えと素人は天麩羅だと思ふだらうが、長えのを漸々詰めたのを揚物てえのだ、それか
 ら早く掛物を出して見せなよ、破きアしねえからお見せなせえ、いんきんだむしの附着
 いてる箱は川原崎権十郎の書いたてえ……え、迂つて転んだので忘れちまつた、醋吸の
 三聖格子に障子に……簾アハハハ、おい何うした、確かりしねえ。主人五左衛門は驚
 きまして太鼓張のふすまを開けて、五「アツ。と口を開けたまゝ水屋の方へ飛出しまし

た。弥「おい……ハ、彼方へ逃げて行きやアがつた、馬鹿な奴だなア……先刻むぐぐ喰つてゐた粟饅頭……ムンこゝに烟の出る饅頭がある、喰かけて残して行きやアがつたな。と香炉を手に取揚げ、銀の匙で火の附いた香を口へ入れ、弥「おゝ熱つゝゝ。五「乱暴な人だ、火を喰つてらア、口の中に疵が出来ましたらう。弥「いえ、にゆうが出来ました。

(扨酒井昇造筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年8月14日作成

2011年9月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

にゆう
三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>